

カンボジア訪問記録

12月23日

- ・ 福岡空港発 11:45 (TG 649 バンコク行き) バンコクにて乗り継ぎ。バンコクまでは周りは日本人ばかりだったが、プノンペン行きの待合いには日本人は少ない。ベルリンから来たファミリーと少し話をして待つ。
- ・ プノンペン着 19:45 (TG 698) 真夏の暑さ。
- ・ プノンペン空港にはNGO校現地スタッフの Dara、Tydy、Sothy、Kounveng、とボランティアの佐野さんが出迎えてくれる。再会を喜び、そのままレストランへ。
- ・ ウェルカムパーティーは“スキスープ”というなべ。きのこや野菜がたっぷりだ。地元では高級な店のようで、おいしい。途中ちょっと停電もある。Dara から地雷について日本語でまとめたプリントを見せてもらう。



- ・ NGOの車でホテルへと向かう。街はバイクと車でごった返す。道路にはゴミ、座り込んで話をする人々、バイクが道まであふれ出したようなたまり場では、サッカーの賭をやるらしい。
- ・ ホテル着 10:00 過ぎ



1 2 月 2 4 日

- NGO校を訪問する。
- 事務所で少し打ち合わせをし、すぐ授業に入る。
- 授業は日本語のクラス。生徒は20人弱、高校生や大学生である。まずは自己紹介。本校生徒の自己紹介に対して「兄弟は何人ですか。」「何時間勉強をしますか。」「専門は何ですか。」などたくさんの質問が出る。みんな話をしたくて仕方がない様子。将来の夢を聞くとみんな日本語の先生や英語の先生、通訳などで、NGO校で学んでいることが夢と直結している。学校に行き、その前後にNGO校に通い、その上家で宿題もするというから、かなり勉強熱心だ。その後、折り紙をした。折り鶴を折ったがこれは慣れないカンボジアの学生にとってはハードルが高かった。兼長が前で説明し、原田が一人一人を見て回る。最後は全員完成し、一緒に写真を撮る。折り鶴について碑前祭の写真で少し説明をしたが、わかってもらえたかどうか・・・その後行ったトウルスレン博物館にはポルポトの犠牲者のどくろの前に日本名のついた千羽鶴が掛けてあった。そんな話を紹介できればもっと分かってもらえたかもしれない。あわただしく授業を終え教室を後にする。教室を出るわたしたちにたくさんの生徒が話しかけてきた。その中にはメールを時々くれる **Sotheng** もいた。もっとたくさん話したかったがゆっくりできずとても残念である。



- ・ 教育省の副大臣を訪問し、交流していきたい旨を話す。



- ・ トウルスレン博物館を見学。この場所のもと学校であり、その後ポルポトの時代には多くの人が収容された収容所となり、今はその悲劇を伝える博物館となっている。外国人は2ドル、カンボジア人はただで入れる。教室を半分に区切った独房、壁には隣からこっそり様子をうかがうための穴があいている。雑居房だったところにはたくさんの方の顔写真が並んでいた。ここで写真を撮った後、キリングフィールドに送られ撲殺処刑されたという。大人だけでなく、子供の顔写真もあった。中に笑いを浮かべた顔があった。どれも悲しい顔である。まっすぐ顔が写るように特殊なイスに座らせての撮影だったという。A棟、B棟と校舎を廻り、最後にC棟に入る。ここには数々の拷問器具がおかれ、最後の部屋にはキリングフィールドから出てきたどくろの一部が安置されていた。



- ・ 昼食。日本の資本でつくられた“友好の橋”を渡り、メコンの川岸のレストランで昼食。メコンでは漁師が網を投けている。橋のたもとには水上生活者の家・バラックもみえる。



- ・ ボットンバッタイ寺院を訪問し、ボンティアさん、パウセンさんに再会する。ボンティアさんには生徒からの色紙を、パウセンさんにはこれまで古田中でやってきた交流のまとめの写真を渡す。寺は孤児院にもなっている。寺院の敷地内には家がいっぱいあって、それぞれ僧侶や子供たち、学生たちが住んでいるらしい。オレンジ色の僧衣が干してあったり、裸足の子供が走っていたりする。お湯をあびているお坊さんの姿もあった。



- ・ 仏教大学のチョン・イム氏、ヌンネイ僧王、ボンキリ僧王を訪問



- ・ キムタウと再会。通訳をしてくれる。日本語の通訳としてバリバリに仕事をしている様子だ。生徒たちからの色紙を渡し、再会を喜び合う。



- ・ ゴミ山に行く。途中、ビニール袋を持って歩くストリートチルドレンや、濁った白い泡の立つ流れの上に立つバラックなどを見る。道が混んでおり、ゴミ山に着いたのは夕方遅くになってしまった。薄暗い中に浮かぶゴミの山。異臭がし、ほこりや砂煙で視界が悪い。Tydy が「仕事が始まった」と言うので近づいてみると、女の人が座り込んでビンを投げている。周りに子供が6，7人いる。そんなグループが至るところにいた。みんな裸足である。キムタウが1人の少女に年齢を聞くと9歳だと言う。こちらは数え年なので8歳ぐらいか。2歳ぐらいの子をだっこしている。「1日に3回ここに来る。なぜなら3回、ゴミ収集車がゴミを捨てに来るから。これから収集車が来るので待っている。ゴミが捨てられたら、すぐお金になりそうなものを探す・・・」問われるままに少女はそう語った。





- 車に乗り込みキムタウに「あの子たちは学校に行かないのか」と聞くと、キムタウはこう言った。「お父さん、お母さんは学校に行かせたいと思っている。でも、お金がほしいからここに来る。ゴミ山にも学校があります。」そう言って指さす方を見ると、コンクリートの枠だけの建物がある。「あれは学校です。でも、子供たちは来ません。学校に行ってもお金はもらえません。ゴミ山でお金になるものを見つけて売ると、お金がもらえます。」まだ使えるビンなどを拾い売るといふ。それらは一つにまとめられ、ベトナムなどに送られているらしい。兼長が「学校に行って勉強した方が、後からお金がもらえるようになるとは考えないのですか?」と質問する。キムタウは「はい、考えません。今のことを考えます。」と言った。それだけ貧困であるということか、それとも教育の力がないということか、私には消化できない言葉となった。
- 夕食は中華料理店。初めて道を歩いて横断する。信号はあるが、守れていない。バイクと車と人の渦。生徒は Tydy に、私は Sothy について必死に渡る。夕食にはチョン・イム氏も参加。キムタウの通訳で校長と話をする。古田中とカンボジアの国際交流に協力してくださるとのこと。



- ・ 9：30過ぎ ホテル着。ホテルから日本へメールを試みるが、1時から4時の間オペレーターで受付をしないと使えないといわれ断念する。

12月25日

- ・ ホテルを6：30出発。NGO校で寄贈する文房具を車に乗せ、コンポンチャムに向かう。プノンペンの喧騒を抜けると、赤土の一本道に入る。道の回りにはところどころ屋台が建ち並ぶ。ビン入りのガソリンを売る屋台も目立つ。メコンに沿って車はひたすら北上する。やがて田園地帯に入る。いたるところに牛や水牛がいる。すきを付けて田を耕す水牛、山積みになったわら（草？）を食べる白い牛たち。濃いピンクの花を付けたウォーターリリーの群生。椰子の木の畑。メコンの川面と余りかわらない高さに田んぼがひろがる。雨期になるとすべては川になるそう。雨期になる前に収穫し、雨期にはみんな漁師になるという。この道路は幹線道路らしく、車の往来は激しい。みんなトラックの荷台やワゴン車の屋根にたくさんの荷物と人を乗せている。中には屋根に20人近い人を乗せたワゴン車もあった。



- ・ 9：00過ぎ、道路沿いで休憩。ドライフルーツを売る屋台でバナナチップのようなものなどを買って食べる。マンゴーは黄色く固くすっぱい。蜘蛛の素揚げにしたものも売りに来たので恐る恐るかじってみる。サトウキビの筒の中にごはんを入れて蒸したようなものは豆も入っていて甘くておいしい。



- ・ コンボンチャムに入り学校までの道は細い赤土のこぼこ道だ。周りの民家は高床式でバナナの木のに並んでいる。Kounveng、キムタウの故郷だという。また、Tydyのお兄さんの家もこの町にあった。



- ・ 11:30 近く、コンボンチャム小中学校に着く。中学生が並んで拍手で出迎えてくれる。白いシャツに黒か紺のズボン、スカート。足は素足にぞうりか裸足。どの生徒も恥ずかしそうに笑っている。セレモニーは向こうの校長先生の話から始まった。歓迎のあいさつの後、「今生徒たちは頑張って勉強しているが、3つの校舎の内2つの校舎で雨期には雨漏りがする。建てかえてほしい。」という話がある。Dara が以前日本であったとき「日本はカンボジアで一番のドナーだ。」と言っていたことを思い出す。着いた時間が遅かったため、授業をすることができない。文房具を渡し、セレモニーだけで交流は終わりとなる。車に戻る前に慌ててメッセージフラッグを渡し、写真を撮ってこちらの意図を伝える。「単なる物資の提供者ではなく、わたしたちは心の交流を求めている。」そう言ったが、伝わっているかどうか分からない。どちらにしても打ち合わせが上手くいっていないのは、確かだ。こちらの意図をしっかりと伝えることは、国際交流の基本のようだ。





- ・ コンボンチャムの食堂で昼食をとる。野菜のスープ、チャーハン、ピクルスのようなすっぱい野菜、トゥーシンサイ（？）という名の緑の野菜の炒め物などで、カンボジアで食べる最後の食事だ。食堂で働く女の子に年を聞くと16歳高校生だという。アルバイトだそうだ。兼長と原田に「わたしたちは中学生だ」と言わせてみるが恥ずかしそうに逃げていってしまう。コンボンチャムのメコンには2つの橋がかかる。一つは竹の橋。一つはコンクリートの大きな橋。大きな橋は「きづな橋」といい日本の資本で建設されたそうだ。



- ・ シントゥームック中学校に行く。プノンペン市街地にあり、生徒数が12000人だという。4時頃着き、校長室に通される。生徒が下校している様子を見て、このままここでも生徒同士の交流ができないといけないと思い、すぐにでも授業で交流をしたいと申し出る。授業に入るのなら先に入った方がいいといわれ、すぐ教室へ。狭い教室には60人ぐらいの生徒が待っていた。長机に3、4人ずつ座っている。後ろの席で授業を見るか、前で何かするかどちらが良いかと聞かれ、日本の紹介をさせてほしい由を伝え、15分時間をもらう。ここでも打ち合わせ不足のため、向こうの担当の先生にはこちらの意図は伝わってなかったようだ。しかし、快く時間を下さり、予定していた日本の紹介を少しすることができた。中学生の生活の紹介やけん玉、日本のお菓子などの紹介であつという間の15分だったが、子供たちがうち解けるのに時間はかからない。最初恥ずかしがっていた子供たちもすぐに笑顔で応えてくれて、帰る頃には手を振ってくれる。少しだけ英語も通じる。その後、校長と生徒が校長室で話をしている間、外に出て下校中の子供たちと話をする。どの子も制服にぞうり、思い

思いの鞆を持っている。鞆の中身は筆記用具とノート。教科書はないらしい。白い粉を顔に付け合っている生徒に「その粉は何か」と聞いてみると、「クリスマス」と答える。どうやらクリスマスの日の遊びのようだ。授業はクメール語、英語、数学、科学、社会、スポーツだけ。音楽、美術、保健、技術家庭科の科目はないという。

- ・ 今回の目的の一つである顔つなぎは一応できたが、かなり唐突で向こうの先生にとっては迷惑だったかもしれない。私が逆の立場だったらとても迷惑に感じると思うので、向こうの先生の当惑はよく分かる。謝罪と感謝の気持ちは伝えてきたが、どれだけ通じているか。これが今後の交流にマイナスにならないことを願うばかりだ。



- ・ ホテルに戻り荷物を取って、プノンペン空港に向かう。プノンペン市内は大渋滞。途中車は全く動かなくなる。NGO 校に寄って、佐野さんや Sothy にあいさつして帰らなかったが、断念する。
- ・ 通りでケンカを見かけた。バイクと車がぐちゃぐちゃに停車し、人だかりがしている。やじうまの1人が交通整理さえしている。カンボジアでは盗みをするると殺されることもあるという。盗みがみつかり警察が来る前に人々が集まり、殴る蹴るで殺してしまうこともあるそうだ。



- ・ プノンペン空港にはボンティアさん、パウセンさん、チョンイム氏も待っていてくれる。慌ただしくみんなと別れのあいさつをする。



まとめ

- ・ 今回のカンボジア行きの目的の一つはカンボジアの現実を知ることだったが、これについてはほぼ目的を達成できたのではないかな。特に、トゥルスレン博物館で見たポルポトの現実、ゴミ山や道ばたで見た学校に行かない（いけない）子供たち、田舎の学校と市街地の学校の差。そういった現実を目の当たりにできたと思う。
- ・ 今、カンボジアはぐんぐん復興している。至るところが工事中で、韓国資本の高層ビルも建つという。外国資本が入り、仕事のチャンスが生まれるためみんな外国語を学ぶ。英語、フランス語、韓国語、日本語の順に人気だそうだ。学校の後塾に行つて勉強する者、家の手伝いをする者、それぞれ一生懸命だ。人口の構成を見ても圧倒的に若者が多く、携帯電話で連絡を取り合い、バイクを乗り回す。屋台に集まる人、携帯

電話も屋台で手に入れるそうだ。街を眺めるだけで、そのエネルギーを感じることができる。

- ・ しかし、反面活気の中に無秩序さも感じる。ゴミだらけの歩道、交通ルールを無視した往来、生活水準の格差をそのままにした生活。一人一人の考え方は仏教に根ざしてとても真面目なのに、なぜこんなに無秩序なのか。カンボジアの人々は敬虔な仏教徒で根底の考え方はしっかりしているが、生活の細かいルールはないという。「～をしてはいけない」というような細かい決まり事はないそうだ。今のカンボジアの人々の明るさ、強さ、タフさを失わずに豊かな暮らしをみんなが享受するためには何が必要なのだろうか。その辺りに、教育の課題があるのだろう。
- ・ 2つ目の目的のいろいろな人との顔つなぎも一応できたと思う。ただ、生徒の立場から考えてみると、もっと子供同士の交流がしたかったのではないか。例えば、互いに名前を名乗り合う場面、1対1で言葉を交わす場面がもっとほしかったと思う。もし、次の交流が実現するのであれば、セレモニーや表敬訪問は極力短時間にし、大切な時間を子供と子供の交流に使えるように工夫すべきである。そのための打ち合わせは現地の学校の担当者に直接すべきである。場所が遠く、習慣や考え方が違うからこそ、細かい打ち合わせが必要である。
- ・ 今後、交流をつなげていくためには、ある程度長い期間で交流できるように中心に交流していく学校を決めること、現地中学校と直接連絡する方法を確保すること、交流の目的をはっきりさせることなど必要だと考えられる。
- ・ 最後になったが、このカンボジア行きを現実のものとしてくださったカンボジア NGO の東理事長と多くのスタッフのみなさまに感謝の気持ちを表したい。「本当にありがとうございました。」